

# 土 淨

昭和十年五月二日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)  
 昭和二十四年四月二十八日 再編省 (特別授承認雜誌) 第三五二号  
 昭和四十七年七月二十五日 昭和四十七年八月一日発行

第三十八卷

第八号

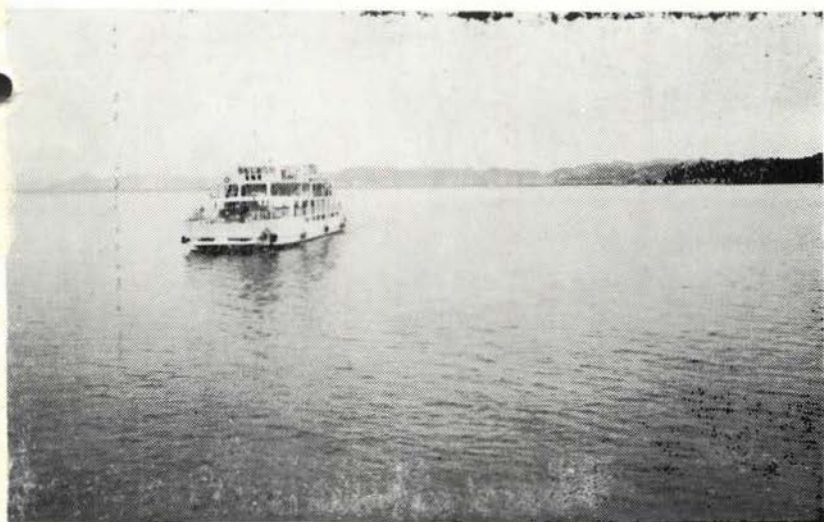


蓮

1972

8

# 八 月 号



## —目 次—

表紙 「鹿ヶ谷法然院」松涛達文画

|              |             |     |
|--------------|-------------|-----|
| 心の公害を除く…………… | 栗 本 俊 道………… | (2) |
| 諸行無常……………    | 真 野 竜 海………… | (4) |
| 「私の趣味」……………  |             | (8) |

菊地謙雄・鳥居良禅・桑山竜進・佐藤美智子・佐賀和章

|                       |             |      |
|-----------------------|-------------|------|
| 聖典解説⑦ 六時礼讃無常偈(上)…………… | 丸 山 博 正………… | (16) |
| 随想二三……………             | 川 内 知 光………… | (20) |
| 信は道のみなもと……………         | 久 保 恵 吉………… | (23) |
| 異僧真覚<第八回>……………        | 柴 田 六五郎………… | (26) |
| 「道」大和への道……………         | 高 橋 良 和………… | (30) |

# 念 声 和 語



## 倒懸（逆吊し）の心

またお盆月です。お盆は盂蘭盆うらんぼんの略で、それは古来救倒懸きうたうけんすなわち逆吊しの苦しみを救う行事とされています。古く印度の人は、子孫によって供養されない先祖の霊はあの世で逆吊しの苦を受けるさかすまひとされ、その苦を救うには盂蘭盆の行事をせよとの仏説から始まったといわれています。

中国人の間にも古く鬼餓きだの俗信があり、子孫に祭られぬ霊はあの世で飢えるというのです。日本人も古来、祖霊を家々の守り神として季節毎の祭りをしたもので、祭られぬ霊が悪霊・邪魔・鬼神きじんとなつてこの世に災害をもたらすとされ、そこでお盆には荒精霊・新精霊・外精霊などに對し特別に施餓鬼棚を縁先などに設けて祭る慣しがありました。お盆と施餓鬼が結びついたのも道理といえましょう。

わたくしは特に逆吊しの考え方に深い興味を覚えずにおれません。

自分だけよければよいといったエゴイズム（利己主義）を仏教は特に斥けます。それが個人であれ階級であれ、特に徒党を組みまた闘争してでも我欲を主張してはばからない「欲望のとりこ」になつたもの、すなわち欲望の中に頭を没して逆立ちしているもの、六道輪廻・畜生道・修羅道・餓鬼道への転落の姿だと見ているのです。

亡くなった者など供養することはない、それより自分のことが第一だと顧みない子孫があつたとしたら、それを見る先祖の心の痛みはどんなでしょう。万一、わが子が盗みをしたたり人殺しでもしたら、親の心は自分が罪を犯した以上のつらさ悲しさに耐えないことでしょう。子孫が真実の人間の生き方を忘れて逆立ちした生き方に埋没したなら、恐らくはやはり逆吊しの苦に悩むに相違ありません。

盂蘭盆こそアバランバーナ（逆吊し）の苦を脱却する道だと確かに言うことができます。

（中村康隆）



## 心の公害を除く

大正大学理事長 栗 本 俊 道

『きずつきし心の子等を抱きよする ははともなりていつくしまなむ』の歌は、皇后陛下が御心を更生保護の事に寄せられて、関係者に賜わった御歌であります。最近の社会現象で多くの問題が生じておりますが、そのなかでも大きな関心事は、青少年の問題であります。学生騒動に端を發したいろいろな事象は、さらにエスカレートして教育の根本まで批判され、追いつめられたかたちはけ口は連合赤軍の反社会活動から国際的ゲリラ活動にまで耳目を聳動する出来事にまで立ちいたっています。心の公害をなおざりにした結果でもありません。

きずついた心は、慈愛の手をさしのべることが何より大切なことはいまでもありません。そしてそのことが母の心で

あり、母性愛の偉大な力が要求されるのです。青少年の非行防止、青少年の反社会活動への対策が、現時点の重大課題となつていますが、われわれ仏教者はいまこそ社会現象をみつめて痛烈な自己反省と発憤興起を要請されます。仏の教えを生かす責任があるからです。

法然上人が、『月かげのいたらぬ里はなけれども、ながむる人の心にぞすむ』と仰せられたのも、心の公害を除去することの大事なことをご歌われたのにほかなりません。物の公害と併行して心の公害の恐ろしさを知るべきであります。物の公害は科学者達の化学知識で対処されましようが、心の公害はどうにもなりません。公害ということばが表現される以前から、宗教は心の公害に対処してきたわけでありま

す。戦乱の巷、世間の不安、人間社会の実態から、浄土の教え、念仏の信仰を打ち出された法然上人は、心の公害を除くこととすることであったと言えます。そのことがながむる人の心と仰せられたのであります。

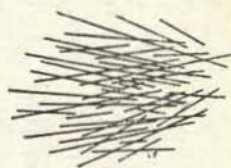
公害とは公共の福祉を阻害するもので、人間の生命尊重に重点が置かれていること今更言うまでもありませんが、心の公害とはとくにわれわれがみんなに知って貰わねばならないものです。前述した連合赤軍事件について考えますと、彼等自身は新聞報道などでご承知のように革命家・志士をもって任じておって非行の対象と思っていないが、世間はその行動を兇悪事犯ときめつけております。そして彼等はすべてが中産以上の家庭に育ち、最高学府に学んだ大学生であったことも、両親にとっては勿論のこと、社会一般の人々にとっても全く割りきれない出来事でありましょう。日本育英会会長の森戸辰男氏は「大学は学校教育法にも明記されているように、学術の教育・研究とともに、道徳的能力を展開させることを目的としている。私は日本の大学の当事者が、大学存在の理由の一つである人間形成の重要性をもっと認識して、これに対する責任を痛感されることを望んでやみません。人間

形成に關するかぎり、大学はむしろ仕上げの場ですから、初等中等教育の責任の方がもっと重いわけでしょう。ところが、初等中等教育においても、知識・技術の教育にかたよって、道徳を軽視する傾向が見られるうえに、入学試験の準備教育によってここでも人間形成が疎外されつつあります。そして学校以外の教育の場の一つは、人間形成の原点である家庭であります。かような視点からわが国では昔から家庭教育を重視してまいりましたし、西洋の学者も人間の基本的な性格がこの時代に形成されることを強調しています。ところが、この家庭が、今日急速に荒廃しているのです。産業変革と婦人解放の思想とは、教育の場としての家庭の存在と、次世代の生育を担う女子の本質である母性を危殆におとしめようとしています。連合赤軍派の学生が貧乏家族や欠損家庭の出身でないことは、よく家庭教育の盲点を露呈しているように思えてなりません。」と喝破されております。われわれが味読すべきものであります。

きずついた心の子らを母の手で、家庭の中心を母性の力で、人間形成の家庭教育を重視することによって、道徳的能力が心の公害を除去し福祉国家を招来する浄土の顕現となることを提言してやみません。正しい信仰生活こそ心の公害を除く絶対要件にほかならぬからであります。

第十七回「浄土文化講座」より

諸行無常



大正大学教授 真野龍海

「諸行無常」——何と大きなタイトルをつけてしまったことでしょう。しかし、私共が生活する日常という場の中には、「ああ、諸行無常だなあ」と感ずることが随分と多いように思われます。時計の秒針が刻一刻をたゆまず刻んで行くさまには諸行無常の本当の姿が隠されています。仏教の教えは、人間にとってごく身近なところで説かれているのです。ある推理小説で、密室に閉じこめられた人が、上から、ゆらゆらと電灯とともに、天井が、じりじりと下がつてくるのを見て、蒼然となるところを描いたのがあります。

ちやうど、そのように、確実に、一定の速度で、私たちの内外を、諸行無常は進行しており、ごまかすことは

できても、脱がれることはできません。老いも若きも、それは同じわけですが、若者にとって、諸行無常は、完成への変化であることが多く、老人よりも無関心なことが多いのも、やむを得ないかもしれません。しかし、あながち、年のせいばかりではなく、その人の人生の読みの深さによるのではないのでしょうか。

あの『平家物語』に登場する人々は、動乱の世の中を活動した若さにあふれるばかりの人々が往来しており、すが、しかも、その中心のテーマともいえるべきものは、諸行無常といってもよいのではないかと思われまふ。

『平家物語』は、事実にもついた文学作品とはいえないものの、虚構というか、フィクションというか、それ自

体が、そっくり歴史上にあったというものではありません。ですが、あの中には難かしい仏教の教や、言葉が、そのまま使われたりしても、たくさんの人々に、長い年月の間、今に到るまで愛用されてきた事は、歴史的事実です。それは、物語り的なおもしろさもさることながら、人々の共感を呼びおこさずにはおれない諸行無常に代表される人間の悲しさ、喜び、そして、それを超えて進まねばならない人の定め、その中で御仏の救いを信ずるものの静かな落着き、といった人の心の渦巻と、永遠なる仏の救いが人々の支持を得たことにあるであらう。表面上のおもしろさばかりでなくて、首尾一貫した仏教、とくに、浄土教、もしくは浄土宗の教を裏づけとする内面的な深さがあることが重要である。この物語は、したがって、仏教―諸行無常―浄土教―弥陀の本願―の理解がなくては、その深さにふれることができないでしょう。

『平家物語』の時代は法然上人の時代と同じです。法然上人は、その中で活躍する木曾義仲の京都乱入の日だけは聖教が読めなかったと語られており、平重衡が、死刑の直前に上人の話を聞きに訪れたという構成などは直接に、その関係を言うものであるが、全篇にわたって、

浄土宗の大切な教が、ちりばめられており、『平家物語』は浄土宗概論といっても差支えないくらいであります。

さて、物語の冒頭に

祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、娑羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす……

とあって、諸行無常の主題が印象よく語られてありますが、これは、『平家物語』が、一大シンフォニーとすると、そのテーマとなるメロディーであります。これが、終りまで、くりかえし現われ、形をかえ、強弱をつけ、消えたかと思うと、また出てくるというように、まとまりと美しさを与えています。それは、この物語をつくっているいろいろな小篇の中でも、同じような形で、つづけられています。

今日、洛西、祇王寺を訪ねると、説明者が、この寺の美しい景色は、桜の花が散りしくさま、もみじ葉のしとねなすさま、雪の降りつむさま、すべて、生あるものが落ちることの美しさにあります、などと語っています。まことに平家物語の舞台ならではの言葉の味であります。しかし、諸行無常というと、そのように、はかなく、ものがなしいということなのでしょう。『平家物語』は、終りは、寂光院に住む建礼門院を訪ねる所で

から、それが偶然であっても、寂光という名から、やはり、全篇、諸行無常の寂しさに満ち、終っているという悲劇的な受取りかたが強いように思えます。無常という字自体すら、ああ無情という字も同じぐらいの感じが持たれているのではないのでしょうか。

そもそも諸行無常は、仏教の三つの旗じるし——三法印という——として、諸法無我、涅槃寂靜とともに掲げられるものの一つなのです。つまり、すべてのものは、移り変りがあり無常で、したがって、そこで、小さな我執をたてることはありえないもので無我であり、我欲、我見を脱し、大なる法とともに生きて、煩惱のざわめきを停止すること、それが、涅槃寂靜であり、仏教の理想であります。諸行無常は、この寂に到って目的を達するわけであります。寂は、そういう寂なのです。また、諸行無常は、是生滅法、生滅滅已、寂滅為楽とともに四句で説かれ、いろは歌は、それをやさしく説いたものです。やはり、その目的は、寂滅で、それを楽となすのだという、悦びなのであります。

このような意味を考えると終りの舞台の寂光院というのは、うまく出来すぎている感じさえします。寂光とは、その寂滅を体得した人の世界、この世が、寂光浄土

といわれるものだからであります。諸行無常で始まり、寂光の喜びでしめくくる仏教の筋をふまえた御膳立ては、すばらしいものだと思えます。

では、どうして諸行無常から、寂滅、寂光浄土へ導かれたのでしょうか。この煩惱を去り、平静な心境に行くのは、どちらかというと浄土宗の行き方とは反対の立場の天台宗とか、禅宗の考え方です。寂光浄土といって浄土というものの、この世の理想境をいうのですから、浄土宗の西方浄土とは異ったものです。ここに行きつくには、むづかしい学問や、修業を必要とするはずです。しかし、『平家物語』に出てくる各テーマの主人公は、あまり、そうしたことは縁のなさそうな白拍子だとか、新興の武士たちです。

祇王は、かつて清盛の愛を受けたものの、仏御前が現われ、その地位を失って、母妹と静かに念仏三昧に暮している所へ、また、仏御前も、清盛の所から、「……かげろふいなづまよりなをはかなし。一昼の楽みにほこつて、後生をしらざらん事のかなしさに、けさまぎれ出で……」といって、許してくれば、いっしょに念仏し、命あるかぎり念仏して往生を果したいと訪れました。はかない世の中で、しばしの楽しみにうつつをぬかしてい

て、これから先の後の世までの長い生きがいを考えなかつた悲しさに気づいて、命のかぎり往生を願うて念仏するということです。

戦乱の場で、武士たちは、高声に十念を称えて死んで行きます。法然上人の声について決定往生の思いをなせというお言葉そのままです。壇の浦で平家の一門が最後をとげる追憶の話の中で、安徳天皇には、海に沈まれる前に、伊勢大神宮に御いとまされて後、西方浄土へお迎えをうけるため、西に向つて御念仏されるようにと申し上げたもうが話されています。建礼門院自身も、阿弥陀如来の御手にかけて五色の糸を手にとりながら往生されたとあります。学問のある人々でなく、ふつうの人間、ひたすらに往生を願うことによつて、無常の中を切り進み、念仏に生きがいを見出したのです。物語りの一番最後に、韋提希夫人の如く往生したとあるが、夫人とは観無量寿経の発端となる人である。悪逆な王子に夫王を幽閉され、このような罪深いものでも救われる方法を示したまへと、仏に願つて、念仏、とくに浄土宗に関係の深いこのお経が説かれたのです。建礼門院や、女官たちに対応させ、六道の中にもあるような苦しみの中でも念仏によりかならず救われるという結びの言葉でもある

う。

諸行無常の苦しみの中に、ひたむきに西方浄土の信仰に生きた姿こそ、小さな自然をふりすて、世間の欲も離れたもので、語らずして、無我であり、それが後生への生きがい、先立つ人々の回向の中に安らぎと法の喜びを見出した尊い姿は、涅槃寂静であり、寂滅為樂であらう。

人の頭脳は、たいへんな記憶や思考を行うもので、どうしてそんなに使つてもこわれなかつたかというと、しぜんに四つの調整法があるという。第一はよくねむること、第二はアルコールで、ストレスをとる、第三は、歌と踊り、第四は、人間らしいやり方で、いろいろな欲求不満も喜びの心で耐えられること、人間として生きることの喜びだといひます。希望を失わずに一日一日好日で生きることがたいせつなのです。

諸行無常に押しつぶされない『平家物語』の人々の生きがいは、法の喜びであつたと考えられます。その故にこそ、冒頭の諸行無常が人の心に側々としてせまってくるのです。

附記

——本稿は講演の速記原稿に講師真野先生が補正加筆されたものです。



＝浄土宗神奈川教区長＝

菊 地 謙 雄

## 私の「趣味」

大正頃まで、どこの家にも見られたものである。幸いに少しの破損もなく完全な型で転がっていた。なんとも言えない粗朴な気品があつて心を奪われたのである。

時代を経た格調の高い名作ではない。骨董的な価値とか、芸術的作品ではない。名もない地方の壺作りが商売のため、一つ一つ土をこねて造つて窯に入れた量産の一つであろう。名工の苦心によつて造型し丹誠こめて彩色して洗練された焼の妙味によつて製作された品物ではないが、妙に私の心を引くものがあつた。人間味溢るる愛情一入といった代物である。以来私は自坊の古い道具箱を開けたり檀家の旧家を訪ねて壺あさりに、あけくれした。だが不思議と見あたらない。最近規格の整った色彩豊かな陶器が出廻つて清潔で、美しく便利のために自然と、かえり見られなくなり捨て去られたのであろう。それでも物置の隅や墓地の花さしになつてゐるのを貰い受けたりして数本を所蔵している。円型のもの、

趣味と言うのは大げさであるが、終戦間もない或る冬、近くの秋谷海岸を一人で散歩していた時、波打際に寄せられていた一本の陶器の壺を拾ひあげた。極ありふれた壺であつたが庶民的なこの焼物に強く魅せられて集め始めた。二合程入るだろうか何んの変てつもない壺である。先代の人々が日常使用した爛徳利であろうか。首が細くくびれた円いずんど、う型で上薬をかけて焼いた手造りの茶色の壺で、明治以前から

鶴首のように首が長く下ぶくれして安定しているもの、角型のもの、真中がくぼんでいるもの等、型も様々で、色も茶、青、白等各様であるが折にふれ、手にして粗朴な人間の匂いを味っているのである。

近頃、茅ヶ崎で東福窯を主宰しているS氏について焼物を始めた。S氏は戦争で左手首を失った傷痍軍人であるが実に無慾恬淡たる人で「作品に追い廻されたり名作にあせてはいけません。みじめですよ。陶器を通して万象を眺め、物の生命を感じずるんですね」と。S氏は全国を廻って土を集めまぜ合せて自分の土を造る。上薬も幾種を混合して独自のものを造る。薪窯や重油窯を七つ持っているが、土によって窯や火加減を工夫する。土造りから窯あけ迄が陶工の仕事であって又楽しみである、型造りとか作品にのみ迫ってはいけない。すべての生命を見ることが。と言われるS氏の言葉に私の名もない壺集めに一脉の関連があるような気がする。

寺院の本堂に燦然と輝く仏像が如何に人々の信仰を深め化益されているかは解るが、無名の巷の石工が巧まぬ鎚をふるって造った路傍におわす石仏が、どれ程人々に心の安らぎを与え捧まれているかを忘れてはならない。聖道門の高度の教理は崇高な教門であるけれど易行念仏門の中に仏陀の温い庶民救済の教えがあることを忘れてはならない。

---

＝鎌倉市大町安養院住職＝  
鳥 居 良 禪

---

正大の英文科に学んでいたころ、慶応の教授であった西脇順三郎氏の著書をよく読んだ。その中に（ああなんちゆう紫の瓢箪だ）という一節があった。それは茄子のことを言っているらしかったが、その表現を面白く感じた。私は卒論のテーマであったユリシイズを読み乍ら次第に西脇詩論に傾いていった。そして自分もいつか詩を書きたいと思った。

数年たって私は詩を書くようになり、当時のシニールリズム詩の機関誌であったVOUGRUPPに参加した。そこで絵画や音楽や写真の新しい動きを知った。写真を始めたのもその頃で、超現実の美を写真で表現しようと考えたのであった。絵でもそれを少し試みた。

その頃ドイツでシニタイネルト氏が主観主義写真を提唱し

て、私は彼の所に作品を送った。それはドイツとベルギーで催された国際主観写真展に陳列された。またニューヨーク現代美術館での（抽象の感覚展）等にも出品した。

詩はしばらく書いていたうちに傾向も少しずつ変化していったが、その中の一連の作品をまとめて処女詩集（石膏の莖）を出した。それは詩と写真を一頁ごとに組合せたものでグラフィック詩集と自分で名付けていた。

この詩集が出てから詩人の間に写真の事が知られるようになって、詩集や評論集の装釘を頼まれるようになった。その中にはジャン・ジュネやハーバート・リードの著書もあった。

日本現代詩人会の会員になって先輩の詩人たちと詩画展を催したり、交友も繁くなった。多年尊敬していた西脇先生が私の寺を訪れて下さって私は大そう光榮に思ったが、それは初めて先生の著書を読んだ頃から二十年も経っていた。

写真ではその後フアッション写真や週刊誌のグラビアを撮ったりもしたが、週刊誌時代で面白かったのはマース・カニンガム舞踊団が来日した時の撮影で、リハサルのあるところでレセプションがあり、前衛音楽のジョン・ケージ、美術のローシエンバーグたちと親しく話すことが出来た。

詩の方はその第二詩集（野分）をイサム・ノグチ氏の装

釘で刊行したが、以来あまり発展しなかった。

青年時代から今日までの事を回顧すると、すべてが（遊び）であつたと思う。私には何をやっても楽しく、またつまらなかったものである。ただユリシイズからカヂユラホ展に至る間に何か一貫したものがあつたかと言えば、それは原始主義的な思考であつたと言えるかも知れない。文明社会から少し離れて、幸福とも不幸ともつかず、何となく生きて行く、のが私の趣味なのであろう。

## 骨のかんざし

桑 山 龍 進

（東京都三田随応寺住職）

上の方にあるものをカミとし、体の上方にある毛をカミ即ち髪といい、髪にさして飾りとするものが、カミサシ・カンザシ・カザシなどといわれて、之には種々の材料で出来、その上部には様々の装品を加工したものが時代とともに沢山ある。これは骨で作った簪（かんざし）又は釵子（サイシ）と

いう奈良時代に出来たもののお話。

東京区内にもまだ畑山林が大部あつた昭和九年頃のこと、大森池上の久ヶ原という所。多摩河口に近い左岸の平坦な武蔵野台地で、南西に河原を見おろし遠く富士、箱根の連山を眺める日当りの好い丘である。ここが宅地開発で縦横に道路が切開かれ、ここから弥生式土器をはじめ、それに続く土師器・須恵器・埴輪・鉄器等の夥しい数の遺物、或は道の断面に堅穴住居・環濠のあと、小貝塚などが発現し、二千年前より奈良時代にかけての農耕を主とした大集落であつたことが解つた。

この地域の南端の小学校の運動場を拡張する時、骨甕が二個並んで出土した。その一つ、高さ三十糎黄褐色素焼の土師式甕、之に径二十糎程の青灰色釉薬焼の須恵式大皿を蓋とし、之を逆さに置き、その周囲を木炭でかこんで納めてあつた。中を検分すると、一体分の成年のよく焼かれた火葬骨が容れられ、それに混つて、線香の折れのように太さ二三糎の白色の棒片が二三糎長さに七個出て来た。屍体と一緒に焼かれたために収納する時折れたらしい。之を復元すると二又のやや反つた長さ九糎のヘイアピンで、頭部は丸く平らで幅は八糎、歯先の開きは一糎半の大ききで、何の骨であるか不明だが一個の骨片をくりぬき磨いて成形し、正しく髪にさす骨

製のかんざしである。漢代殖民地の朝鮮楽浪古蹟よりは之と全く同形の竹製のものが出ている。久ヶ原のは日本否世界に唯一の例品である。而も火葬骨と伴出したことが特にすばらしい。骨蔵器に納つていた為によく保存されていたのである。土葬であつたならば腐朽消滅していたに違ひなく、土工の手を逃れて私が調査発掘したためこの奈良時代の貴重品が救出されたのである。

火葬の思想習俗は道昭より少し前から行われたらしいが、近畿を遠く武蔵多摩流域地帯にこの種の骨壺甕が処々に出土するのは明らかに仏教の火葬によるものである。国分寺設立に先立つ天武天皇の頃より度々の開拓集団移民、武蔵国に幾度か百濟僧尼の移り住んだのも、こうした弥生時代を経て土師須恵文化を受ついだ人々の集落の地であつたのであろう。火葬骨壺の存在こそ記録には遺らなかつた仏教導伝のすがたである。

かんざしの主が火葬骨の男性であつたか、死者への情念、死出の旅路へのせめてもの餞けとしてたつた一つのそれを、ともに茶毘にふしたものであつたらうか。探すともなく遺跡を訪れ、蒐めるともなく身近かに現れる古代の遺物、すべては曾つての遠い日の人々の手より手へと遺された宝である。



=鎌倉市長谷住在=

佐藤美智子

「私はねえ、絵の方はどうも……ちょっとお待ちになって

……

(美智子さん、絵を習いたい?)」

受話器を片手に、母が隣の部屋に居た私に問いかけた。

「絵? わあ やり度いわ。」

こうしてお誘いを受けた母に代って、月一、二回の絵の稽古に通い出してからもう十年になる。思えばその時、私は絵のお稽古が日本画か油絵かも知らず、ましてどんな先生に師事するのも全く聞く事もせずに、まだ生まれて二、三ヶ月の長女を抱いたまま、そのような時間的余裕が果して作られるのかどうかも考えないままに絵の勉強を始める事になったのである。

絵が日本画であったことも、先生が前田青邨画伯の愛弟子で仏画をかかれ、その後間もなく異例の若さで院展同人となられた芸大の平山郁夫先生であったことも、私にとって本当に幸せであった。小さい時から絵は好きで、小中学校の頃「将来油絵でも勉強したらどうか」と奨められたりした事もなく、唯暇があるとぼんやり泰西名画帳に見入っていただけであった。その私に日本の伝統美を日本画を通して触れさせ、少しずつ日本人の心に目を開かせて下さる機縁を与えて下さったのは、寺に嫁いで来た私への御仏のはからいでなくて何であろうか。

十年といえは長い様だが月一回位の主婦の稽古事は専門的に打込んでいられる方の一、二年にも値しないだろう。しかし日本画に全く素人だった私も、赤坊を背負って「二宮尊徳ね」などと冷やかされながら墨絵をやり、ある時は仏画の模写に没入し、皆寝しずまった深夜、窓を叩く風の音を耳にしながら仏画に描かれた合歡あむぎの葉の葉脈を一本一本息をひそめて大事に大事にひき写していった事もあった。風の音が描いている合歡の葉の葉ずれのささやきと一つになって、私の遠い過去からでも聞こえてくるのではないかという感情に沈潜しながら、私は一人そういう時間を楽しんだ。お稽古を始めの間もなく長男を失くした時も、その悲しみのどん底で虚空

をさまざまの魂を引き戻し支えたのは絵のお稽古であったかも知れない。

何故なら、絵をかく時間、それは私にとって自然をみつめる時間に他ならない。薔薇の花一本を見ても花が語りかけてくれる世界は大きい。何も難解な事を考える必要はない。唯黙って自然をみつめ、花の息を息し、草木と一如となり遊戯三昧とでもいおうか、自然と我との渾沌未分の中に飛びこんで自然に浮かび上って来たものを描く。同じ一本の薔薇を描いても、お稽古仲間達、決して同じ絵はかけない。薔薇は薔薇でも皆が各々見ているバラは、その人の心の歴史を通したバラでしかない。良い絵をかく事は即ち心を豊かに深めて行く以外にはないのである。開かれた心の眼で花や鳥や木を、そして自然の中の人間を眺め渡す時、きっと良いものが表われるのだと思う。私は時々「目をとめて見ねばこそあれ武蔵野の草の葉ごとにをける白露」（池坊専応）を思い出し、「不動智神妙録」（沢庵）の中の一節をおもう。

仮令一本の木に向ふて、其内の赤き葉一つを見て居れば、残りの葉は見えぬなり。葉ひとつに目をかけずして、一本の木に何心もなく打ち向ひ候へば、数多の葉残らず目に見え候、葉一つに心をとられ候はゞ、残りの葉は見えぬ。一つに心を止めねば、百千の葉みな見え申し候。

「花を見て花を見ず」の世界、形で表現し得ない世界をギリギリの処まで表現し度い。その為には勿論、たゆまざる技術的勉強は必要であるが、たとえ技術的に最高度に習得し得たとしても、どうして表現出来ないものが残る。それを通じさせるものはその人間の持つ深い心以外にはないのではないか。念のこもったものは人の心を打つ何かを持っているのではないか。古くから親しまれて来た多くの仏画や仏像も、作者達の御仏に対する渴仰の祈りが永遠の美しさを現わさしめているのではないか。……

十年間ヨタヨタと幼児の足どりの如く歩いて来た私も、絵とは何なのか、自分の絵の方向もほんの少し解りかけて来たこの頃であるが、一見何でも無い様な絵が人の心に深くく入り、どうしても目を放せなくなるような、そんな絵が描けたらと考えつつ、今はまだまだ技術習得の段階である。

人にこびる必要もなく、見せる為にかくのでもない、ただ描く事が好きという「趣味」としての絵を持っている事は、私にとってこの上もない幸せ、贅沢と考えている。

日本人でなければ描けない絵、信心のある者でなければ描けない絵、そんな絵がかかるのはいつのことか。私の趣味も家事と育児と専用の間を縫って、これからもヨタヨタと続きそうである。

## 佐賀和章

(東京都三田法音寺住職)

旅先で、ふと目にふれた小さな民芸品、それをおみやげに持ち帰ることのうれしさは、最も楽しい旅の思い出の一つになりましょう。

そして、それが私の趣味の一つにもなっています。

先年、インド、タイを旅したときのことです。

ニューデリーでドルショップに立ち寄りました。高価な宝石や大小の木彫品、象牙あるいは美しいサリー地の並ぶ中に、サラサがありました。私が手にしたのは、麻地に濃茶の単純で大きな花形のプリントが入ったものでした。恐妻家の習性でしょうか、とたんに女房殿の顔がちらつき、m約五百円ということ、四mほど求めました。とは言っても、その素朴さ、加えて私の価値観念に一致した土産品だとうれしくなったからです。

店を出ると早速、インド人ガイドのM氏に得意気で見せました。すると彼、訝んな顔をして「奥さんがいるのか」と問います。いやこう見えても二十八才娘一人と答えると、彼「私と同じ年だ。して奥さんは？」四十五年十月生れ、「これも同じ」と彼。娘一年六ヶ月、「まったく同じ」と彼は喚声さえ上げます。いやはや、サラサを前に、二人は懸命に会話をにつけ（否、懸命なのは私）すっかりうちとけたものです。

以後五日間M氏は私達に同道し、ベナレスにて明朝別れるという晩、彼は私をロビーで呼びとめました。そして一人のご婦人の座るテーブルへ。紹介されたのが彼の奥さんだったのです。M氏は一八〇cm八〇kgはある大男、それに比して私は一六〇cm五十五kg、同年とは思われぬ貫録の違い。ところが彼の奥方も、造作こそ彫りの深いインド美人ながらご主人と負けず劣らずの体格の持主、アアこの方は私の趣味といきませんでした。

それでも、私はこのサラサ女房に似合うかななどと話しかけ、彼らからは、おいしい紅茶をプレゼンツされるなど、素朴な一枚のサラサのとりもつ縁とはなりました。

バンコクのホテルは、ルンビニ公園の近くでした。夕刻友

## 表紙の解説

### 京都鹿ヶ谷 法然院

人と散歩に出かけますと、子供達が沢山タコ上げをしています。ヤッコに似たのや、角や円いの、風をいっぱい受けて、泳いでいます。その中で、妙に長いのがあります。ヘビダコなのです。逆三角の頭をもち、胴を長く長くしたグロテスクなヘビが空を舞っているのです。公園の左手広場に、多くのタコ売露店商が並んでいましたので、早速十バツ（約百五十円）也を奮発して、その手のタコを一つ求めました。赤い目がとび出し、緑地に青のタテジマが入り、逆三角の頭部に約二十cm四方のヤゴがつき、その四辺に糸が張っています。徐々に細くなる胴体の部分が、いわゆる足がわりなのですが、なんと全長二mにも及びます。

早速、飛ばしにかかりました。ところが、糸が10m足らずの為か、走って試みる回数、みな失敗です。そこは以心伝心、子供が二人かけ寄って、タコを拾い上げ差し上げました。糸を張ったまま私がグイと引くと同時に、チビ君ほうり上げてくれました。するとどうでしょう。パンコクの夕空にあがったのです。ヤッター！という私の声に友人やチビ君らが一緒に笑ったのはゆかいでした。

そして今、サラサは女房の家着に加工され、ヘビダコはついにスモッグの空に舞うことなく、娘につたづたに破られ、四帖半の本箱の上に無残に横たわっています。

浄土宗捨世派の本山である法然院は善氣山万無寺と号し、円光大師靈廟の一つにかぞえられている。法然上人の弟子住蓮・安樂によつて六時礼讃が修せられた旧跡として、あまりにも有名であるが、これにまつる院の女御松虫・鈴虫の出家騒動は、折から法然上人の念仏信仰が国民各層に流布・浸透したことに対する反動として、その後の上人法難の原因の一つとされている。

そのうち頽廢し、一小堂宇を存するのみで遺跡を伝えていたが、延宝八年、知恩院三八世心阿万無上人が、弟子忍徹上人と共に幕府に働きかけ、二千坪を得て同院を中興したのである。その頃から本尊直壇に毎朝二五の生花を散華するようになったという。

本尊アミダ如来像は平安期恵心僧都の作とされ、また本堂には法然上人自作の上人像が安置されている。門の東傍の丘上にある石塔の阿育王塔は、真亮が近江国阿育王山石塔寺を模して建立したものの。他に多宝塔・砂灘などがある。方丈は桃山御殿の遺物であるが、その前には、善氣水と称する名泉があり、同院のかもし出す幽玄さとマッチして、見るに足りるものである。なお墓地には法然塔をはじめ、内藤湖南・河上肇・谷崎潤一郎ら著名な学者文人の墓がある。

日没礼讃無常偈

諸人ともに聴きたまえ  
日没無常の偈を説かん

人は営みしげくして

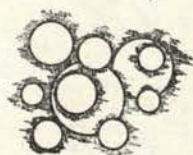
日ごと夜ごとにそのいのち

滅び去るをも覺り得ず

風にゆらるる燈しびの

消えなんとする如くなり

住み難くして六道を



六時礼讃無常偈〔上〕

丸山博正

(大正大学講師)

行くえもわかずさまよえり  
未だ解脱し得ざる身は  
あわれ苦海を出でがたし  
いかで驚き懼れざる  
おのおの聞けよ、汝らは  
健く力のある時に  
自ら策し勵まして  
永遠の住家を求めよや

昭和四十九年は法然上人が浄土宗を開かれてから八百  
年目を迎える年になります。上人の開宗が善導大師の  
『観経疏』のみちびきによったことは大変有名なことで

す。法然上人が「弥陀の化身」として仰がれた善導大師は、称名念仏こそ、凡夫救済のための阿弥陀仏の本願であるとして、それまで、とかく低く見られていた称名念仏の真価を見出された方です。その教義は主として『観経疏』に表わされていますが、これに対し、往生浄土の法を人びとに実践させる方法を定めたものとして『法事讃』・『観念法門』・『般舟讃』と、今ここで取り上げる『往生礼讃』（『六時礼讃』）の四部の著作があります。

『往生礼讃』は日没・初夜・中夜・後夜・晨朝・日中の六時に阿弥陀仏とその浄土をたたえた讃偈の文を唱えて礼拝し、帰命し、ひるがえって自己をかえり見て懺悔し、往生を願うように作られたもので『六時礼讃』として広く世に知られています。六時それぞれの終りの部分に無常偈が説かれていて、いよいよ人びとに往生を願う心をおこすよう勧められています。六時が日没から始まっているのは、日の没する彼方に、西方極楽を思うため、これは『観無量寿経』の十六観の最初が「日想観」であるのと同じです。

日没礼讃の讃偈の文は『無量寿経』の中で阿弥陀仏の徳性を十二の光によって表わしたところの十二光仏を中心にして十九拝し、次の懺悔の文に続いて日没無常偈が

説かれています。したがって無常偈は讃嘆・懺悔によって阿弥陀仏に帰命し、仏の前に自己を投げ出して、自己のいたらなさを悔いるという順を踏んだ後に説かれることになり、いわゆる宗教的感情が盛り上ったところで説かれるという点を念頭に置いて、よくよく味読すべきものなのです。

さて、その内容は、今はまさに日の没せんとする時である。人生の出發を日の出とすれば、終着は日没である。すべてのものは刻々と変化し、若者もやがて老化し、死んでしまう。しかもその死は、いつ突然やってくるかわからない。まさに風にゆられる燈火のようである。ところが人びとは、人生はいつも日中のように明るく、生き生きとしているものだと思いがちである。そして何とかなると思っているうちに、結局は何も解決しないままに、執着を残したまま死んでしまうのである。このような生死の繰り返しでは地獄・餓鬼・畜生、修羅・人間・天という六道をめぐっているだけで、いつまでたっても生死輪廻の苦海から抜け出すことは出来ない。何故このことに對して驚き、おそれおののかないのか。人生の解決に真剣になれる今のうちにこそ、往生を願って励むべきである。

以上が大体の意味ですが、ここでは生死輪廻を繰り返す、解決のない生き方に対し、「永遠の住家」という表現で浄土を表わしています。これでも分るように往生とは生死輪廻しなくなることなのです。

## 初夜礼讃無常偈

諸人ともに聴きたまえ

初夜なる無常の偈を説かん

煩惱深く底いなく

生死の海は涯もなし

苦をわたる船まだ発たず

など眠りをばむさぼるや

励く勤めていそしみて

心を西に定むべし

初夜礼讃の讃偈の文は、同じく『無量寿経』からのものです。ここでは善導大師がみずから、経文の中から特に重要な箇所を選んで詩文化しています。阿弥陀仏の浄土は、すべての菩薩が等しく讃嘆するすぐれたものであ

ること、念仏による往生の因果などがその内容であります。

六時の無常偈の内容は、すべて無常を説き、往生を願うよう警告し、策励したのですが、六時それぞれの時刻に応じて、適切な字句が配せられており、ここに詩人としての善導大師がしのばれます。

さて初夜無常偈の内容は、人が自己の煩惱の深さに気づいて、反省しない限り、生死輪廻という苦海は、いつまでも続くのである。今や日も没してしまつて夜となつた。日没から初夜へと時が移るように、人の世も生から死へと時々刻々と移っていくのは、動かしがたい事実である。それなのに煩惱に深くおおわれている者にとつては、生死輪廻の苦海を脱するための船はあつてなきに等しいのである。こんな状態なのに、何故、人生の惛眠をむさぼっているのか。道はただ一つ、往生浄土を願うことである。

以上が大体の内容であります。

なお『徒然草』には太秦の善観房というものが、後醍醐天皇の頃六時礼讃に節をつけて声明をしたということが記されています。このことが事実であるかどうかは別として、六時礼讃に節がつけられて、それが美しい声に

戸川靈俊著

# 『若き日の軌跡』

B 六版 二三〇頁 予価八〇〇円

発行所

京都東山

初音書房

よって唱えられることによって、聴衆が浄土往生の願いを強めたであらうことは否定できません。法然上人の弟子の住蓮と安楽が鹿ヶ谷で、別時念仏を行なった際、六時礼讃を修したところ、聴衆の中の女官が発心し尼になったという有名な話があります。

『徒然草』といえは、その第七十四段に無常に気づかない人びとを評した一節があります。その内容は、蟻のように集まって東西に急ぎ南北に走っている人間達は、貪り求めて、飽きることを知らない。結局は待ち受けているものは老と死なのに。しかし迷っている人間は老と死を恐しいと思わない。それは名誉や利欲を求めることに心がくらんで、やがて死ぬことに気づかないからだ。また愚かな人間は死の近づくのを悲しむ。それはすべて

のものは刻々と変化するという道理を知らないからである。というものです。ここには迷いに心がくらんで死を忘れている人と、変化の道理を知らずに死を悲しむ人が見事に評されています。しかし批評として見事でありますが、どうしたら良いのかは書いてはありません。もっとも『徒然草』にそれを求めて読むのは考えものです。

死とは、だれでも恐しいものです。先に述べたように往生とは生死輪廻から脱することなのです。ですから往生浄土の教とは「死」を説いているのではありません。「死の解決」を説いているのです。そしてそれはとりも直さず「生の解決」でもあるのです。

大学の庭に宗教を説き哲学を講じて二十有余年。東山沿いの哲学の小径を逍遙しながら若人に語りかけし青春と人生との珠玉の随想集



## 随想 一二三

京都市西賀茂西方寺住職 川内 知光

### 一 働らくということ

昨年九月下旬信者のお迎えの車にてその宅におまいりに行く途中に追突事故にあい、頭部と胸部に打撲をうけ、年内病床に臥していましたが、医師からは血圧やら血液の検査など、色々と検査して、「内臓には少しの異状はありません。和尚さんは長生きせられますよ」と言われていましたが、十二月中旬になって急に悪化し、之は数日にて癒なをりました。がその時から歩行が困難となり、ステッキによっても百米位しか歩くことが出来ず、本堂に行ったり、来客のお相手をしたりして日を送っておりましたが、このままでは外出が出来ずノイロ―ゼ気味になっていましたが、松葉杖に頼れば一キロぐらいは歩けることがわかり、ほっとすることができ、二月からは

自動車の送迎やら松葉杖の歩行などにて、とにかくおまいりという働はたらきができることになりました。

何らの仕事が出来ず、一月ぶらぶらしていることは、人間にとってどれだけ淋しいことかということをはっきり知ることが出来ました。人間は此の世に働らくために生れて来たのだ、治生産業之皆仏法なりで、檀信徒へのおまいりが日々の充実感を齎もたらして呉れることになり、嬉しい日々を送ることができました。

### 二 道義心

昨年八月上旬、東京O女子大の学生さんから電話があつて、「西方寺六斎念仏を見せて頂きたいのですが、道順と実施の時間を教えて欲しい」とのこと。西方寺六斎念仏は八月十六

東京都の四大家行事の一つ大文字五山の一つである船形万燈籠を点火したあと、同じ人々によって行われるもので、「両者を御覧になった方がよい、それで船形万燈籠が午後八時十五分に点火せられるから、それ迄にお越し下さい」と言っておきましたが、当日その時間にYさんは来られ、船形と六斎との間に一時間余りありますので、その間、船形万燈籠の縁起、又六斎念仏の縁起から、仏教の話、念仏の話などについてお話をいたしました。が、仏教、念仏についてよく分り収獲がありましたと喜んでいられたが、「旧い型であると言われた西方寺六斎念仏もそのリズムが、決して古いものでなく、近代の臭いが充分あって驚きました」と言って帰って行かれました。

それから一ヶ月程して、私の写っている写真、六斎念仏の写真、沢山送って来られ、私の五年前の著述『生きるための断片』について批評をして欲しいと呈上いたしました。が、父、母、兄、私と四人で読みまして、両親感想兄の感じ、そしてYさんの批評を詳しく書いた手紙を頂きまして、私自身、次の著述する場合に大変参考になりましたので、その旨書いて返事の礼状を書いて送りました。

それから半年程して、「本年三月〇女子大を卒業しまして、卒業論文も先生から賞めて頂きましたが、之は偏えに和尚さ

まのお蔭です」と喜んで来られ、「就職は神奈川県〇小学校に定まりました」との礼状が届きました。

「小学校に御就職おめでとう、しかし貴女の小学校の先生をしていられる間に小学校の教育は大変革が行われると思えますから、之をはっきりと把握できるように勉強して下さい」と御祝の手紙をさしあげましたが、早速Yさんから手紙が来て、和尚さんの言われる大変革の意味が分りませんので詳しく教えて頂きたいとのこと。

詳しく説明いたしました。が、概要は、文化勲章受賞の念仏の行者である岡潔博士も言っているように「小学校は道義を教えることを忘れ、高等学校では理想を入れることを忘れて、之では日本は亡びる」とのこと、私も同じ思いでこのことを思えば悲しくてならないのです。切角小学校に教鞭をとられるのであれば一隅を照すために御精進を御願いたします、と返事をいたしました。

### 三 あしあと

昨年八月NHKの人物登場に出ました時のことですが、アウンサーとの一問一答の二十分ですが、さすが仲々巧く私を引っ張り出して心易く問答が出来ましたが、

アナ「和尚さんとお話をしていますと、私に前進せよ前進せよと鞭うたれる気分になります、和尚さまの今後の進みかたについて述べて頂けませんか」

川内「私は既に七十歳を超えています、まだ日々前進を考えております。そして人間として生まれたからには、その足あとを残さねばならぬと覚悟しております。足あとは、社会、国家のための足あとは勿論結構であります、小さな家庭の中の足あとを残すことでもよいのです。

お婆さんが居られた時はこの部屋まで奇麗に掃除して下さったのに、その亡きあとはこの部屋の掃除することを怠ってどうも仕方が無い、というのもお婆さんの足あとであります」

アナ「和尚さんは『生きるための断片』を御書きになり、又藍綬褒章や、勲五等をおうけになり、又お寺の庫裡を改築せられ、立派な足あとだと思いますが、まだ足あとを残す何かを御考えになつていますか」

川内「明日のことは誰しも約束することが出来ませんが、私としては既著『生きるための断片』は失敗作だと思つております。それで若し未だ命脈があるとすれば、之の続編を書きたく、日々読書に精進しております。之は命ある間に完成しないかも知りませんが、日々この方針のもとに充実し

た勉強をしていること、それ自身が目標に向つて進んでいるので、出来なくとも仕方が無く日々の充実生活そのものであつて嬉しいことではありませんか、私の年令は人間の一生が一冊の本とすれば、私は序論、各編が既に済んで、弥々結論を書くべきであつて、最後を飾りたく思つております」

## 四 明 日

「明日はあるのか？」

明日は誰も見たもの経験した人はない、それでも昨日があつて今日がある。従つて明日はあると信じているだけです。

人間の一生を今日とすれば、前生が昨日であり来生が明日である。

この明日は信仰の中にあるのです。

之を思えば今日も大切だが来世の明日も同じく肝要である。お念仏は今日から明日にかけてのかけ橋であります。

老境に入つて病床にあること四ヶ月、念仏の門に入れて下さつた両親、その他多くの人々に感謝して静かに病の床に臥していることが出来ました。

明日への期待が弥々深まってきたことは一生の結論期に入つた私自身の喜びは無限のものであります。



## 信は道のみなもと

久保 恵 吉

(理博・横浜市緑区在住)

「衣食足って礼節を知る」という言葉がある。修行の積んだらしい人であるなら、どんな貧しさや窮乏においこまれて、礼節を失うようなことはないかもしれない。しかし、大部分の平凡なわたしたちは、着るものも、食べるものも、あるていどは満足できる物質的な生活が充たされなければ、礼節どころではない。

あの戦後の社会的混乱、虚脱、道徳の頹廃(たいはい)した世相をかえりみると、敗戦の絶望に起因することはもちろんであるが、食糧不足で飢餓状態に陥り、食べるものもなく、着るものもなく、住む家もなかったことも大きな原因であった。

今日ほど、日本が経済的に繁栄して、国民総生産では世界第二位とまで謳われながら、町にも海にも山にも悪徳が氾濫

(はんらん) しているのは、一つには落ちついて住める「家」がないこともあるかもしれない。現在では「衣食」だけではなく、「衣食住足りて」こそはじめて礼節を知るといふべきかもしれない。

しかし、逆に、物質的に豊かになりすぎて、「三種の神器」といわれる品種もどんどん贅沢(ぜいたく)な高級品に変わっていくように「限らない欲望」からくる欲求不満や、レジャーの有りあまりすぎが、かえって背徳の横行を促進している、ともいうことができる。

人間というアニマルは厄介なシロ物で、社会福祉制度が良くなりすぎると、かえって働く意欲を失って、怠けものになったり、老人の自殺がふえたり、悪質犯罪が逆に増大したり、性道徳が乱脈になったりする実例が現にりっぱな福祉国家といわれる国々にある。まことに人間という生きものは扱

いにくく始末のわるい存在である。

しかし、人倫の道が正され、社会秩序が保たれなければ、国家も人類も、衰亡に向かうことは明きらかである。祖国や人類の自衛保存のためにも、道義という土台が社会の底にしっかりとすわって、道徳という大黒柱が国家社会のとまん中にちやんと揺るぎなく立っていないと、行き先が不安でしかたがない。

それはなぜだろうか。一口にいうと、戦前の古い道徳が崩壊して、それに代わる「新しい道義」が、四半世紀以上たっても、いまだに生まれてこないということであろう。

生まれかけてはいるのかもしれないが、しっかりと根を張って定着していない。新しい道義の苗木はいろいろ植えられたのだが、戦後社会の荒風にゆらいで、毛細血管の根がしょっちゅう切れてしまい、新しい風土のなかに亭々(ていいてい)と高くそびえるまでに育っていないのである。

○  
最近ある雑誌のコラムに「近かごろは、『人間の顔』ばかりがのさばり出して、良い意味での『国民の顔』がみられなくなったことはさびしいことである」ということが書かれていた。国民であるより前に、まず人間であることが大切であ

ることは、いうまでもない。

しかし、盲目的な国民や、性急なナショナリズムは困るが、一人ひとりの人間もやはり自分の属する国家社会に責任をもたねばならないと思う。

明治勃発期の日本人や戦前の人は、善くも悪くも、国家に對して責任のある面構え(つらがまえ)をしていた。権力の座にない一介の市民であっても、俺れだつて天下国家の片棒をかついでいるんだ、という気風(きふう) (きつぷ) があり、それだけに自負と誇りのある風貌(ふうぼう) をもっていった。そういう意味の「国民の顔」がなくなってしまったような気がする。

つまり、マイホーム主義といおうか、それはそれなりに「平和国民」の見本みたいで結構なのであるが、一身一家のことしか考えず、国家のことなぞ知っちゃいないといったげな顔ばかりになった感じがして、いささかわびしい気がするのである。

もちろん、国家意識ばかりが露骨に先走って肩いからす事大主義も困りものではあるが、自分の生まれ故郷に対する郷土愛と同じように、祖国愛、愛国心というものはなくてはならない。戦前に軍閥が、「討ちてしやまん」とばかり気遣いじみて叫んだような、好戦的な、帝国主義のもつ、排他的、

独善的、ひとりよがりの誤った愛国心ではなく、自分たちが生まれ育った祖国をこよなく愛するというような、優雅な愛国心はほしいものであるし、当然あってしかるべきものと思うのである。

その心を養うものはなんであろうか。裏づけとなるものが、国民の道義心ではないだろうか。

○ 近年の科学技術の革新は目をみはらせるものがある。人間はほとんど何んでも造れるようになった。新幹線も、摩天楼も、何十万吨の巨大なタンカーも、音速を越える超大型旅客機もコンピュータも、ついにはロケットで地球の引力を離脱して他の天体、月の世界にまで人間が行って帰って来られるようになった。すばらしい進歩をとげたものである。

しかし反面近かごろの人間自身に、「思いあがり」がみられるのではないだろうか。

原子力という永遠のエネルギー源をせっかく解放しながら、それを人類の繁栄と幸福に奉仕させるまえに、原水爆という核兵器を造った。人間の頭脳の発達の結果、人間が造ったものによって、まかりまちがえば全人類が共滅しかねない試験の十字路に、マナ板の上に人間が神の裁きを受けるかのように立たされているのである。科学技術の進歩発達も、人

間のモラル、英知のコントロールなしには、みずからの知性におぼれて、人類自殺の凶器となるわけである。

あれこれ思いをめぐらすとき、人間を本来のあるべき姿に甦えらせるために人間の道義を確立するために、現代は何にやるべきであろうか。

そこにこそ、宗教の道があると思う。戦後、日本の指導者たちは無神論、無信仰をもって、インテリーのトレッドマークにしてきた。しかし、現代社会において、「繁栄のなかの貧困」をみつめ体験するとき、何によってこの貧困を克服していくかというところ、宗教以外に道はなさそうである。

青年時代に、先年亡くなられた、芝増上寺法主の椎尾弁匡先生から、華嚴経に説かれている「信は道の源、功德の母」という言葉を教えられたことを思い出す。道徳やモラルの根源をなすものは、信の確立であり、法然上人は、

「生死の家には疑をもって所止とし、涅槃の域には信をもって能入とす」

といわれていることを教えられ、いまだにこの言葉が耳朶（じだ）に残っている。

「智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし」

という「お念仏」は、人間存在の基本となる信仰を育てる大切な道である。



## 異僧眞覺

### 第八回

柴田 六五郎

(滋賀県近江八幡市在住)

火の手が近いと言った和尚の言葉は、現実の火の手となつて京の街を襲つた。天明八年一月三十日午前五時

頃、団栗<sup>どんぐり</sup>辺の両替屋から出たという火は、折からの東風に煽<sup>あお</sup>られて鴨川を越えて忽ち京の密集した街々に襲いかかった。

朝の早い和尚が兩戸を繰つた途端、方々で乱打する半鐘の音と共に、火事特有のどす黒い煙が境内を疾風<sup>はやて</sup>のよう<sup>よう</sup>に吹き抜ける。

「眞覺っ！ 妙信っ！ 火事じゃ、火事じゃっ！……早く本尊様をっ！」

と、怒鳴り乍ら本堂へ走る。夜着のまま飛び出した弟子達と、前机に供えられた香炉やローソク立を放り出す

ように取り除けると、三人声を合せて丈六の阿弥陀如来を持ち上げた。大蓮寺の須弥壇<sup>ぶだうだん</sup>は高い。

「眞覺！ 下へ降りてささえよ。ひとまず前机へ乗せよ」寄せ木造とはいえ丈六の本身は重い。漸く前机まで移動させた時、本堂の中がバツと赤く染まると同時に、東側の障子が一斉に火を吹いた。次の瞬間、ゴウッ！という風とも焰の音ともつかぬすさまじい響と共にど、つと眞つ黒な煙と火の粉が本堂に吹き込んだ。

「早くしろっ！ 眞覺、正前の扉を開けろっ！」扉を開けたのが悪かった。開けると同時に更に烈しい火勢が、火のついた紙切れや木片<sup>きへ</sup>を堂に投げ込んで来た。ワツと熱気が充滿した。

「和尚さん！もう駄目です。逃げましょうっ！」  
真覚が叫んだ。

「馬鹿者っ！阿弥陀さんを放って逃げられるかっ！早く担げっ！」

無我夢中で三人が弥陀像を下陣まで運んだ時、既に火を吹いていた板戸の半分が風に引き千切られて和尚の後頭部に飛んだ。咄嗟に身をひるがえした真覚は、左の掌でこれを払いのけるや右手で和尚の袖を掴んで引き摺り出すように本堂の椽にまろび出た。

「妙信さんも早くっ！」

続いてとび出した妙信を急かして門を出ようとした

聖徳太子御草創

六角堂



西國第十八番霊場

頂法寺

が、それは既に真っ赤な炎をあげている。

「土塀を越えよう」

真覚が四つ這いになって踏み台となった。土塀の外は火と煙に追はれて逃げまどう人々で一杯である。

「北じゃ、北じゃ！西へ逃げて煙に巻かれるぞっ！」

隣家の棟が落ちたのかバリバリッという響きと共にどつと炎の柱が立ち、火の粉と煙が路地にひしめく人々の頭上に被さって来た。子供の悲鳴と女の金切声に

「阿呆奴っ！こんな物持ち出して何になる。早よ逃げるんじやっ！」

男の怒声が飛ぶ。

「おういちょいと退いとくれ、危いぞーっ」

手廻しよく大八車を引き出したものの、積んでいるのは手桶や火鉢のガラクタ。それを見付けた真覚は、側で腰を抜かして、声にならない口をバクバク開けて手を差し出している老婆を抛りあげるように乗せた。人の波に揉まれてもみくちやにされ乍ら、煙に痛む眼を返した時、大蓮寺の本堂がワッツと火を吹いた。もう四五丁も離れていたが、彼はその火のほてりで顔を灼かれるように感じた。それが吹きすさぶ黒煙の切れ目から覗いた寺の最後の姿であった。

「如来様が焼けて了われた。何という勿駄ない。南無……」

着のみ着のまま焼け出されの人々と、一反風呂敷に背負えるだけを背負って逃れて来る男女老若。荷は持たず老人を背に子供を追い立てるように、或いは大きな荷を背負い両手に子供の掌を執って、引つたて何事かを喚き散らし乍ら群衆の中を泳ぐように行く女。「眼が、喉が痛い」と泣き叫ぶ子供の声。気が狂ったように意味のない叫びを挙げる者。押し倒されて起き上れない老人の吼えるような呻き。天も地も煙に覆われて、世の終末を思わせる恐怖の坩堝の中を、三人は濁流に押し流される石くれのように運ばれて行った。

京の街を東西に走る丸太町の辺り迄逃げのびた群衆の中を「御所なら大丈夫じゃ。御所へ行け、御所へ行け」という声が潮騒のように伝わって来た。煙も少し薄れて一寸安堵にも似たものが感じられた。みんなぜいぜいと肩で呼吸をしていた。いや、自分が呼吸を切らしている事に漸く気付いたのだ。丸太町の街角では、西へ急ぐ避難者の波と御所を目指す波がぶつかって揉み合った。真覚も辛の子のように挟まれ乍ら

「一先づ御所へ行くぞ」

と叫ぶ和尚の背中を見失うまいと懸命に人を掻き分けたが、その時ぶつかった相手の男の下駄で、いやという程右足の子指を踏んづけられて跳びあがった。見る見る血のにじみ出した指先から、痛みと共に素足の冷たさがジンジンと這い上ってくる。左の掌のヒリヒリとした感触に気付いて開いてみると、一面の水泡。本尊を運びながら燃える木切れを夢中で払いのけた時の火傷である。開いて痛みを増した掌を、彼は再び握りしめると、右の掌で更にその上を覆うように重ねた。

「御所なら大丈夫じゃ」

群衆は蛤御門から雪崩れ込んだ。門番はいちはやく逃げ出したのであろう、遮る者も無かった。築地のかげに崩れるように腰を落とした人々は、我勝ちにと石垣の下の流れにひりつく喉をうるおした。真覚は水に漬けた掌をゆっくり開いた。痛い程の水の冷たさが、今は却って快よかった。覗き込んだ妙信が、

「まあひどい！ 痛いでしょう真覚さん」

と声をあげた。

墨を流したような空と、その下に荒れ狂う煙の様を目で追っていた和尚が、

「風が変る。此処も危いぞ」

とつぶやいたが、その声が終らぬうちに、

「あっ！ 天皇様がお移りじゃ。ほれっ！」

起ち上った人垣の肩越しに覗くと、天皇の輿が慌しく紫宸殿を出て建礼門に向うところである。

「天子様がお移りになるとは……此処も。おう！ 煙が

／＼

南の丸太町御門の辺りを既に真っ黒く包み込んだ煙が御所の広い庭を矢のように走る。「ワッ」と人々は又北に向って馳け出した。

「爺さん。早よ逃げなあかんやないか」

呆けたように蹲る傍らの老人に、真覚は火傷の無い右掌を差し出したが、年寄りには白い頭を力なく左右に振り「いや、俺はもう動けん。どうぞ行つて下され」

佐藤 治子 著

## 新刊『旅 日記』

アメリカ・シルクロード・インド篇

四六版 三二〇頁 価一五〇〇円（千一四〇円）  
ご用のむきは本会までお申込み下さい。

と、右手を胸の前にあげて片拌みの格好をした。「バシバシッ」と立木の火を吹く音が彼を追い立てた。

今出川から鴨川を東へ渡り、聖護院の森を抜けて知恩院に辿りついた三人は、山門の石段を上り切れずにへたへたと腰を降した。

「ひどいことじゃ。応仁の乱でも斯うはなかったじゃろう」

喘ぎながら話す和尚の眼は、京の街を舐めるように延々と拡がって行く業火ともいうべき火の色を見ながら瞬いた。

鴨川から西、京の街の大方を焼き尽した火は、翌る日の朝漸く静まった。三人は知恩院で貰った古下駄と握り飯を持って、余燼のくすぶる街を帰って行った。本堂の焼け跡、放り出して逃げた本尊の在り処と覚しき場所には未だ燵が残っているのであるか。一筋の白い煙がゆつくりと立ち昇っていた。真覚と妙信は和尚にならって掌を合せた。

「南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏」

本尊の阿弥陀如来を焼いてしまった懺悔の念仏であったが、真覚の臉の裏には、これも焼けてしまったであろう六角堂の如意輪観音の姿がありありと浮んだ。

# 道

## 大和への道

高橋 良和

東に大和三山、西に金剛、葛城、それにつづいて二上山がある大和の東南、そこは大阪と山一つの地である。

この辺も宅地造成が盛んで、昔の姿はだんだんうすれゆくが、そのなかにあって当麻の地には今もなお中将姫の伝説とともに由緒深い当麻寺がある。詳しくは奈良県北葛城郡当麻町である。その寺は当麻寺奥院である。

法然上人の伝説のなかには、上人がわざわざ足を印したところもあるが、そうでなくて、あるときはその弟子が、あるときは夢中で、その地に法然上人があらわれたような伝説が霊蹟となつていふところがある。

当麻寺もその一つである。

この寺の歴史は古く、はじめは昔大阪府下にあつたらしく、白鳳二年（六七三）にこの地に移つたと伝えられる。

そうしてこの当麻寺が、知恩院の奥院と言われているが、それにはこのようなわけがある。

知恩院の第十二代の住職に誓河という人があつた。この人は永仁五年（一二九七）の生れである。康安元年（一三六一）に法然上人の百五十回忌の法要を修行した際に、勅命によつて、

祖師の伝本正副とも甲乙なし、一庫に両部

を秘蔵し、若し図らずも非常の災あつて一時に烏有ともなりなば憂きこと限りなければ一部はいかにも世を離れたらん遙るけき名山に蔵して末代の宝典に残すべし。

ということ、同じ場所に保存しておれば一朝ことあるときに二つが災害に遇うので、誓河はこれを大和の当麻寺に一つの寺を建てそこに保存することになつたといふのである

それが今日の奥院である。

ところがこの法然上人の伝本とともに、上人の木像もこの寺に捧持してこの地にきたのであるが、そのことについて、

同寺の「当麻寺奥院本尊遷座之記」をみると

誓河が七十二歳になった広安二年（一三九五）酉の春のことである。ある夜のこと、

知恩院に安置せる法然上人の木像が、まのあたりあらわれて、誓河に告げたのである。今悪人きたつて吾が額に釘を打ったので、その苦痛に堪えられない。ということであった。誓河は夢さめておどろき、ただちにその木像のところに近よってみると、

なんとその木像に竹釘がうつてあったというのである。誓河はその木像から釘をぬき去ったときに、その額から血の流れること肉身の如しとつたえている。これを「血垂れの御影」と称している。

まことに不思議なことである。

誓河はこの御影をもって奥院に遷座したというのである。

この遷座之記によると、知恩院の御影をもつてきたようであるが、当時知恩院には法然上人の御影が三体あったらしく、そのうちの一体をこの寺に移したらしいのである。

誓河はこのとき、夢のなかに法然上人が立

つたとつたえている。

「我れ本地は大和国当麻寺にあり、我れ彼の地に移すべし」と告げたという。その夢も六夜にわたつてつづいたので誓河は思いきつて、遂に遷座を考え、自らもこの地に住して、難生院を創建したので今の奥院であるという。

この木像は、法然上人四十八歳のとき、武藏野国の御家人桑原左衛門入道が、上人から化導をうち、その報恩のためにつくつたものであつて、上人自ら四十八度開眼したという縁起がある。

このような「血垂れの御影」というような伝説は、法然上人の伝記には珍しいものである。

そして奥院のこの木像には、それらしきところがあるというから、尚さら痛ましい感があるのである。

こういふことでこの奥院には、法然上人に関する宝物が多い。

御本尊のこの法然上人御影は国宝であり、

外に、法然上人行状画図、四十八巻、国宝、そして選択本願念仏集がある。これはまことに貴重なものであり、本宗にとってはこよなき典籍である。

知恩院とこの奥院との間には、珍しい契約状が残っている。

そのなかに、この寺において永代水魚の思をなしてこの旨に背かざること、念をおしているが、奥院の住職と知恩院の住職とにより相談をして両寺の住職を決めること也、御影堂の僧に不義のものあれば衆として罰せよ、といったこともある。

それだけに関係の深い寺であるといえる。名高い中将姫の菰糸まんだらはこの寺の曼陀羅堂に安置してある。天平宝示年中（七五七〜七六五）に中将法尼が蓮の糸をもつて織つたものである。浄土三部経のなかの観経の説く浄土を願う姿を織りなしている。

法然上人の足跡はないが、その木像やその宝物と言ひ、上人には深いつながりがあり法然上人のお経を偲ぶにふさわしい寺である。

# 伺 御 中 暑

|                                                                    |                                           |                                                                    |                                                                           |                                                         |
|--------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------|
| <p>大阪市天王寺区上之宮町二六の二<br/>上宮学園長<br/>小林 大 巖</p>                        | <p>大正大学理事長<br/>栗 本 俊 道</p>                | <p>京都市北区紫野北花ノ坊町九六<br/>仏教大学長<br/>藤 原 了 然</p>                        | <p>家政学園長<br/>三枝樹 正 道</p>                                                  | <p>東山学園<br/>東山高校長<br/>東山中学校長<br/>東山幼稚園長<br/>藤 原 弘 道</p> |
| <p>淑徳短期大学<br/>食物栄養学科・社会福祉学科<br/>東京都板橋区前野町五―三―七<br/>電話(九六六)七六三一</p> | <p>熊本市九品寺三丁目一ノ一<br/>鎮西学園長<br/>上 田 貞 雄</p> | <p>光 照 寺<br/>住職 正 本 実 閑<br/>〒182調布市柴崎一―三八―二<br/>電話〇四二〇―八二―一七二九</p> | <p>北 川 一 有<br/>長 寿 院<br/>東京都台東区鳥越二―十三―十六</p>                              | <p>函館 称名寺<br/>住職 須 藤 隆 仙</p>                            |
| <p>蓮 間 真 道<br/>山口県下松市 周慶寺</p>                                      | <p>千日観音 午後七時半<br/>岩国市楠町<br/>専 念 寺</p>     | <p>上田市中央北二―七―三<br/>呈蓮寺<br/>横 内 浄 音</p>                             | <p>空海が心のうちに咲く花は弥陀より外に知る人はなし<br/>(弘法大師のアミダ様信仰がうかがえる一句である)<br/>柏市 南 竜 寺</p> | <p>東京都港区芝公園一―三一―一六<br/>天 光 院<br/>真 野 竜 海</p>            |

# 伺 御 中 暑

吉井泰順

戸川靈俊

京都市左京黒谷町西住院  
大阪工業大学・東大阪短期大学

近竜寺住職

松濤弘道

栃木市万町二二一四  
電話〇二八二二二一〇八〇二番

だん王法林寺

信ヶ原良文

京都・三条大橋東詰

東京都渋谷区幡ヶ谷二一三六一一

清岸寺

原口徳正

平塚市立野町六

晴雲寺

塚田弘導

静岡市本通七丁目

極楽寺

山口俊定

〒五二〇一二三

大津市大石東町五一四

浄土寺

電話大津四六一〇五九  
振替 京都 四四九

室蘭市大沢町二一二八

善行寺

飯島英徳

光明寺住職

白幡憲佑

横浜市南区庚谷久保山

「浄土」購読規定

一部 定価 百円

(送料十二円)

会費一力年金一、二〇〇円

(送料 不要)

浄土

八月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十七年七月二十五日印刷

昭和四十七年八月一日 発行

定価 百円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇二 振替東京八二一八七番

# 伺 御 中 暑

岸 信 宏

京都市東山 知恩院

浄土宗宗務所

浄土宗宗務支所

大本山増上寺法主

大野 法 道

大本山光明寺法主

石 井 真 峯

大本山 善光寺大本願

法主 一条 智光

法然上人御誕生地

誕生 寺

岡山県久米郡久米町

中 島 真 孝

中 島 真 哉

東京都港区南青山二丁目二六の三八

梅 窓 院

東京都文京区小石川三丁目二四の六

伝 通 院

東京都台東区橋場一―四―七

保 元 寺

大仏殿 高德院

住職 佐藤密雄

祐 天 寺

住職 巖谷勝雄

東京都目黒区中目黒五―二四―五三

〒一五三

両 国

回 向 院

八月十六日

来迎会奉修 九品仏

清 水 順 碩

世田谷区奥沢七―四―一三

鎮西流根元地聖光寺住職

小 林 忍 戒

京都市下京区寺町綾小路下ル